

# へらエサ POWER BOOK



## Contents

02 総論  
冬～初春のへら鮎釣り

04 浅ダナのセット釣り

10 チョーチンのセット釣り

16 沖打ちの  
バラケとグルテンのセット釣り

20 バランスの底釣り

28 段差の底釣り

32 付録  
くわせエサの作り方

34 へらエサ性質表

総論

## 冬～初春のへら鮎釣り



冬～初春までのへら鮎釣りは、大別して二通りに考えることができる。

ひとつは、まだ水温が下がり切らず、へら鮎の活性があるときの釣り。年内いつばいぐらいと考えよう。この時期は新べらの放流も多く行われるため、思わぬ大釣果に結び付くことが多い。バラケ性を備えた両ダンゴや両グルテン

のバランスの底釣り。バラケとグルテンの沖打ちの宙釣りなどが効果を上げる。

もうひとつは、一年で最も水温が低下する真冬の釣り。年が明けたころから、多くの釣り場がこの状態に突入する。年々へら鮎が大型化していることから、この時期の食い渋りは厳しくなっており、釣り人もその対策に追われることとなる。

しかしそのお陰で、セット釣りを中心に、エサやセットイングなどが飛躍的に進化を遂げているともいえよう。管理釣り場はわらびウドンをくわせエサにしたセット釣り中心（浅ダナ、チョーチン、段差の底釣り）。野釣りのセット釣りで使うくわせエサのグルテンも、グルテン量が多くて

膨らみを抑えた、ハリ持ち重視になつていく。

ただし、このふたつは厳密に分かれるわけではない。釣り場の状況や混雑度によっても変わってくる。へら鮒の状態を見極めて、活性に合わせた釣りをするように心掛けよう。

また、最近の管理釣り場の



冬の釣りの傾向としては、ベレット系のエサが重要性を増していることを忘れてはならない。これは宙釣りから底釣りまで、すべての釣りに共通していえることだろう。ベレットの持つ高い集魚効果と同時に、その重さがへら鮒のタナを作ってくれるからだ。

さらにいえるのは、形の崩

れにくい粒状ベレットの高い効果。新製品の「粒戦」は非常に高い集魚力を持ち、粒状の落下バラケがへら鮒をくわせエサへと向かわせる。この冬のセット釣りは、「粒戦」をいかに使いこなすかが、ひとつの重要なキーポイントになるかもしれない。

浅タナ、チヨーチン、段底に共通する傾向は、バラケエサ

の持たせ方や抜き方が、さらに繊細になつてきていることだ。例えば1mのセットで、ゼロなじみの釣りといっても、水面から何cmぐらいのところまでバラケを抜くのかといった、高い技術が求められてくる。

段差の底釣りはいったんウキを深くなじませ、じわじわとバラケを抜くのがセオリーだが、浅なじみでフワツと抜いてしまつバラケから、なじんで簡単に返さない持つバラケまで、幅は広い。バラケ使用のテクニクが、釣果を大きく変えてしまつといえよう。

バラケの使い方に関連するが、PCやグラスなどのムクトップのウキが、多く使われるようになってきているのもひとつの傾向。段底では、そのストロークの幅がへら鮒の状態をよく伝えてくれるし、浅タナセットでは、ウドンのみでのサワリも、敏感に伝えてくれる。ムクトップのウキの使

い方もキーポイントといえるだろう。

そして、冬の釣りは、ハリスの長さが重要だ。釣り方によって、大体の目安となる定番的なもの（例えばバランスの底釣りなら上30cm、下35cmなど）があるが、最近はそのだけでは釣りきれなくなりつつある。より柔軟で幅広いハリス使いが、釣りを決定づけるようになってきている。

